

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

幼子の面手広げし初音かな

相模原市 はやし 央

△評▽幼子が面手を広げたことと今年初めてウグイスが鳴いたことに直接の関係はないが、春を迎えた喜びが響き合う。

物干さぬ竿に束の間春の虹

香川 佐藤 浩章

△評▽雨上がりの空に虹が立った。間もなく物干しざおに洗濯物が並べられることだろう。

島の道全部坂道百千鳥

水戸市 砂金 祐年

春浅し捨てる田畑見て廻り

筑西市 大久保朝一

袖に付く灯油の臭ひ冴返る

志木市 谷村 康志

海峡を見わたす丘に風光る

明石市 吉室 奨

春浅し駅北口の喫茶店

伊勢市 奥田 豊

銀行の終活講座春兆す

東久留米市 小山 博子

人形に歯の並びをる余寒かな

川崎市 折戸 洋

駅までの傘に重たき春の雪

川崎市 大門由美子

西村 和子選

入船の波さんぶりと蘆の角

和歌山市 溝口 圭子

△評▽港が近い岸辺のアシの新芽。「さんぶり」という擬音語が効果的。水中から現れたみずみずしい光も見えてくる。

カーナビの知らぬ道行き山笑ふ

神戸市 岸下 庄二

△評▽カーナビは便利だが、時には指示に従わずに回り道もした。季節の発見の喜び。

老梅や納屋も母屋もとうに無く

羽生市 小菅 純一

鬼瓦ふんづけてゆく恋の猫

大阪市 深井 保男

春落葉みな裏返りあたりけり

東京 望月 清彦

伸びやかな少女らの声ミモザ咲く

北九州市 土居 康二

千駄木は抜け道多し猫の恋

東京 徳原 伸吉

藩校の門の全開梅匂ふ

弥富市 富田 範保

春立つや磨きこまれしウインドウ

松山市 井上 保子

ゆげ立てて仔牛生まるる春立つ日

盛岡市 福田 栄紀

井上 康明選

山笑ふところどころに石切り場

富士宮市 渡邊 春生

△評▽木々が芽吹いて風に揺れ、山は明るく笑うかのようだ。石切り場が何カ所あって、石を切り出した跡の荒々しい崖がのぞく。

春風小さき星を奪ひあふ

前橋市 西村 晃

△評▽春の風は空を吹き、地上をさらし、夜には、夜空の星を奪いあつかうように吹き募る。

辛夷咲くカランダラの地へ牛放つ

福岡市 小出 達夫

宇宙ごみ春の光に反射して

浜松市 久野 茂樹

大寒や山慮へくたる石畳

富山市 後藤 秋臣

蠶るや海底にある蒙古古船

東京 山口 照男

牡丹雪とけてくちびる火照りけり

小平市 中澤 清

清明や新聞配る音聞こゆ

相模原市 はやし 央

母の手のおほらかなりし蓬餅

鎌倉市 小川 求

水際を鷗舞ひゆく春の風

甲府市 清水 輝子

片山由美子選

剪定の音の跳ねをり梨畑

加須市 萩原 康吉

△評▽剪定は、果樹の結実をよくするために伸びすぎた枝を切る初春の作業。音が跳ねると聞いたのは作者の心の弾みの表れ。

耕して土の匂ひを解き放つ

北九州市 篠原 敬祐

△評▽冬の固くなっていた土がすき返される様子を、匂ひを解き放つと言ったところに注目。

賤しきは素足をさらす雛かな

神戸市 林山 任郎

春浅し退院の肩強く引く

千葉市 斉藤まち子

菜の花や土手一面を塗りつぶし

久喜市 梅田ひろし

担ぎたる舟の雛と目の合へり

奈良市 梅本 幸子

貝殻のつきたる鐘二月果つ

姫路市 板谷 繁

来世また人に生まれぬ虫出づ

和歌山市 津田倭文香

竜天にのぼり神杉うねりをり

那須塩原市 谷口 弘

出港のフェリーを照らし春満月

札幌市 清水 志



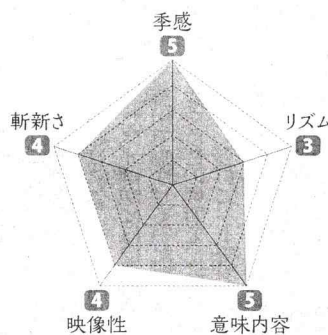
注目の句

円堂実花

剣道着の匂ひ抱えて卒業す

マチ

チャートで採点



今回から担当させていただく円堂実花です。どうぞよろしくお願ひします。

さて、初回に取り上げるのは、季語「卒業」の一句。旧かな「匂ひ」と新かな「抱えて」の混在が残念ですが、特定の匂ひが記憶や感情と結びつくことを生かした、中七の表現が巧みです。

生徒が胸に抱くのは、剣道着だけではなく、その匂いと共であった、仲間たちとの思い出の数々でもあるのでしょう。読み手はそれらを想像し、学校の剣道場の独特の匂ひも感じるのです。

えんどう・みか 1971年金沢生まれ、名古屋在住。俳人の夏井いつきさんが組長をつとめる俳句集団「いつき組」所属。

アプリ 俳句をふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句をふてふは富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら